



ヨーロッパと世界における 正義と自主性のためにたたかうロシア

アレクサンドル・ヴォロンツォフ
ロシア科学アカデミー東洋学研究所部長

わたしは、金正日総書記生誕 81 周年にさいして開催されたチュチェ思想全国セミナーにおいて講演できることを光栄に思います。

自主と自主権がチュチェ思想の真髄であるということは、よく知られていることです。こんにち、国家と人民の自主性のための闘争は、極度に先鋭化しています。ロシアは、そのたたかいの先鋭化した部分であるといえます。なぜなら、ロシアは、軍事的な方法でのたたかいを余儀なくされているからです。いま米欧諸国は一様に、ウクライナにおける紛争を「ロシアによる、いわれなき侵略」とみせかけようとしています。実際には、ウクライナ紛争は、NATO のとめどない東方拡大がもたらしたものであり、NATO は、昨日ロシアを包囲したかと思えば、今日はすでに東アジアに向かって突進している状況があります。

わたしたちはこんにち、世界政治における二つの路線の対立を目撃しています。ひとつは、米国が主導する、米欧諸国による一極支配を拡張しようとする路線です。もう一つは、主権国家間の平等な関係や、各々の民族性や尊厳を尊重する多極化した世界を構築しようとする路線です。

わたしはここで、セルゲイ・ラヴロフ・ロシア外相が、ロシア公共メディアからインタビューを受けたさいの発言をご紹介します。ラヴロフ外相は、米国の世界戦略について説明し、つぎの要素を強調しました。

「わたしは少なくとも、オバマ大統領が任期中に、“アメリカの特権的な地位”について言及せざるをえなかったことについて、みなさんが当時の文献を読まれるよう提案します。オバマ大統領の発言に関する文献はいまではテキストが容易に入手できますので、読むことには問題がないはずです。みなさんは、トランプ前大統領の任期中の発言、

『米国は特別な国であり、米国のような国は世界中のどこにもなく、だからこそ米国人にはきわめて重い責任が課されています』という同様の内容についても、文献で読むことができます。バイデン大統領は、“アメリカの特権的な地位”を様々な機会で述べていますし、大統領の側近たちは、そのように発言することを定式化しました。例えば、米国国務長官のアントニー・ブリンケンは、『米国人は自己の指導権や比類ない指導力を発揮しなければなりません。さもなければ、世界は混沌たる状況に陥ってしまうでしょう』と述べました」

「つぎに、いかにもお粗末な発言と言えるものですが、2021年、米国国家安全保障担当大統領補佐官のジェイク・サリバンが、アメリカの特権的な地位について述べた発言をご紹介します。わたしは、それはとんでもない発言であると思っています。彼は、アメリカの特権的な地位について議論し、『米国は、民族性や歴史的同一性について議論する余裕がなく、世界中に新しく、自由な民主主義を広げるべきです』と述べました。この発言が意味するものはただ一つ、米国民以外はみな、自己の歴史を語る権利がないということです」(2023年2月2日、『ロシア24・ロシア放送』のインタビューに答えて)

わたしはここで、ウラジーミル・プーチン・ロシア大統領が、米欧諸国の一般的アプローチについて述べたことをご紹介します。プーチン大統領は、米欧諸国がいかなる同一性をも認めないことについて、つぎのように強調しました。

「同一性を認めるということは、国際的なルールです。米欧諸国は、だれもかれをも、自己の目的を達成するために利用する道具に変えようとしています。そして、米欧諸国の圧力には与せず、かれらの道具にはなりたくないと思う人たちは、制裁を受けることになります。……そして、このような米欧諸国の動きにたいして何の手段も講じなければ、米欧諸国がやろうとしていることはみな同じで、反対する人たちは一掃されてしまいます。反対者たちは、かれらによって政治的に抹殺されてしまいます。ロシアにたいして、そのようなシナリオを妄想することは、これまでも、そしてこれからもできないことであり、ましてやそれを実行することもありえないでしょう」

「自主的で独自の文明を有するロシアは、これまでも、そして現在も、一度も、自らを米欧諸国の敵として位置づけたことはなかったし、いまも位置づけていません。ロシアはただ、自己の生存権や、自由に発展する権利をかかげているにすぎません。重要な

ことは、わたしたちは、みずからが新たな覇権国家になろうとはしていないということです。ロシアは、一極化した世界を、二極化、三極化、あるいはそれ以外の世界を支配する秩序に代えることを推奨していませんし、米欧支配を、東、北、南の支配に代えることを推奨していません」(2022年10月27日におこなわれた「バルダイ国際討論クラブ」第19回会議の最終総会に参加したプーチン大統領の演説)

『ロシア外交政策』(ロシア外務省)は、こんにち、つぎのように分析しています。

「米欧諸国は、そのほとんどが、数世紀にわたり発展途上諸国を略奪し搾取したことにより自己の繁栄をきずいた国々であり、これまでの発展を維持し、他国の犠牲のうえに自己の経済を支えていくために、世界支配を保持しようとしています。米欧諸国は、これまでずっと民主主義的な国際関係の発展を阻害しつづけてきました。米欧諸国は、この目的のために、新植民地主義的、かつ米国中心の“法による秩序”を、世界の大多数の国々に強制的に受け入れさせようとしてきました。

米国と、米国の要求に全的に答えようとする他の西側諸国は、ごく一部の「例外的な」国々とそれに追随する国々だけで、世界を分割する政策をとってきました。この目的を達成するために、米欧諸国は、世界が米国によって承認された「正当な」民主主義国によって構成される、新たな「白黒はっきりした」パラダイム(方式)を導入しました。

もう一つの、多極化した世界を構築しようとする国々は、ロシア、中国、イラン、ベネズエラ、キューバ、朝鮮のような、「専制国家」と名指しされる国です。

米欧諸国は、もっとも悪辣な植民地主義的な慣習を踏襲しています。米国の指示にしたがうことを拒否し、自主的に行動する勢力にたいしては、一方的な制裁、恐喝、脅迫などによって、ときには、しばしば直接的な軍事力を行使することを通じて、抑圧しつづけています。米欧諸国に忠実であることを約束した勢力にたいしては、自由が与えられています。一例として、ロシアと民族的、言語的共通性をもつ地域を抑圧し、民族浄化政策を実施し、暴力を行使したウクライナの民族主義者には、米国は、あからさまな支援をおこなっています。米欧諸国は、これを長年にわたっておこなってきました。米国は、あの悪名高いモンロー主義の哲学的概念を世界中に広めたいと思っています。米国の願いは、地球を自己の裏庭にすることです。

ロシアはいつも、加盟国の主権平等を定めている、国際法上の基本的な原則を含む国連憲章の基本原則を守るために、国際的な取り組みの先頭に立ってきました。

このことと関連して、わたしは、数にしておよそ世界の4分の3を占める国々が、対ロシア制裁には与しなかったということは、理に適ったことであると申し上げたいと思います。これらの国々は、自己の尊厳と自主性を固守してきた国々であり、西洋式の座標系にそって自己の生活を営むことを拒否してきた国々であり、自己の経験から、独立前に属していた旧ソ連のやり方について熟知している国々であるからです。これらの国々は、ウクライナ紛争にたいして、すなわち、ヨーロッパにおける長期にわたる安全保障問題から生じている、ウクライナにおける紛争にたいしてバランスのとれた立場をとっています。

ロシア外務省は、ロシアの基本動向についてつぎのように概括しました。

「われわれは、現在の状況をもたらした要因についてきちんと説明する努力をしつづけています。われわれが恒常的に接しているアフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国は、ロシアの立場に理解を表明しています。そのような関係があるがゆえに、われわれは、これらの国々とあらゆる分野において積極的に関係を発展させることができているのです。われわれは、中国とのあいだで、二国間の戦略的パートナーシップを着実に強化しています。ロシアと中国の関係は以前にもまして良好です。インドとの関係においても、着実に、集中的に、特権的な戦略的パートナーシップを発展させています。米欧諸国による圧力があるなかでも、われわれは、東南アジア諸国、とりわけ ASEAN 諸国において、緊密で多面的な協力関係を促進させています。われわれは、アジアの大半の国々との関係において、なかでも、イラン、パキスタン、スリランカ、朝鮮などとの関係を発展させています。

植民地主義の残滓を克服するための努力の一環として、ロシアは、発展がめざましいアフリカ諸国との協力を特別な関心を向けています。ラテンアメリカは、世界が多極化していくなかで、ますます重要な役割を果たしています。ラテンアメリカ地域は、ロシアにたいして友好的な地域です。ロシアとラテンアメリカの圧倒的多数の国々とのあいだには、幅広い分野での対話が確立されています。

ロシアは、世界の大多数を構成する発展途上国と、二国間関係と各種の組織との関係の両面で、交流をおこなってきました。わたしはここで、とりわけ、上海協力機構(SCO)やBRICSの枠組みにおける対話について言及したいと思います。

これらの枠組みには、NATO(北大西洋条約機構)やEU(欧州連合)にみられるような高

圧的な規則もなければ、指導者、追従者の関係もありません。利害関係の真の均衡にもとづく決定がおこなわれています。そのため、加盟国の主権平等を尊重する国連憲章の要求に全面的に適うものとなっています。以上のことが、これらの新しいタイプの機構との関係を促進し、最終的には加盟希望国の数を増大させる主な要因となっています。

ロシアは、アラブ諸国連盟、アフリカ連合、その他のアフリカの小地域における多くの団体との関係を促進しています。セルゲイ・ラヴロフ・ロシア外相がこのことについて、2023年2月3日、統一ロシア総評議会の「海外同胞にたいする国際協力や支援に関する委員会」会議で言及していました。

わたしはまた、ここでプーチン大統領がロシアとヨーロッパ地域との関係で強調していたことと関連し、つぎのことを付け加えます。

多極化は、ヨーロッパがその政治的、経済的特徴を復活させるための、真に現実的かつ唯一の方途です。

実をいうと、この多極化に関する概念は、ヨーロッパにおいてこんにち、はっきりと認識されている概念です。ヨーロッパでは法的権限の及ぶ範囲がきわめて少なく、その結果として、ヨーロッパの人々はいま、互いを相食む状態に陥っています。だれが決定権を有するかのみが公示されます。ヨーロッパ諸国は、EUとNATOの協力に関する共同宣言に署名をし、そのもとで、もしNATOが、ロシアの国境沿いに各種の兵器の配備が必要になれば、NATOに加盟していない国々の領土を含め、NATOが求めるものすべてをNATOに提供しなければならないようになっていきます。これらすべてのことには、いささかの曖昧性もありません。

オラフ・ショルツ・ドイツ連邦首相は、先日、公的な場で、ヨーロッパの安全保障は、米国のみ依存していると発言しました。そのような状況のもとで、EUが、米国にたいし、ヨーロッパの経済や産業に関する協力を要請したり、米国領土内のヨーロッパ企業に補助金を支給するよう願ったりすることは、まったく意味をなさないことなのです。

フランスのブリュノ・ル・メール経済財務相がだいぶ前に言っていたように、ヨーロッパの企業にかかる電気代は、米国のそれよりも4倍も高いのです。フランスのエマニュエル・マクロン大統領は、米国にたいし、電気代の調整、割引ないしは支払免除の措置を講じるよう促すつもりだと発言しました。

しかしながら、経済的にはヨーロッパは完全に米国に依存し従属していながらも、ヨ

ヨーロッパの指導者の意識の根底にある、人種の優越感や新植民主義的思考の残滓が、突如として、また、鮮明に噴出してしまふのです。

EU のジョセップ・ボレル外務および安全保障政策上級代表は、その発言が最近、思いがけずに世界を唾然とさせました。彼は、ヨーロッパは花園であるが、世界の他の地域はジャングルであり、ヨーロッパはそのような地域からは隔離されるべきであり、また、ヨーロッパは他の地域の動向を注視しなければならないと述べました。このような認識、このような精神世界は、民主主義の擁護者と自称する米欧の論壇の士のなかに、一人、二人と常時見かけられます。

米欧政治の主要な特徴の一つは、一度決めた合意からますます遠ざかろうとすることです。世界は本質的に多様であり、米欧が人々を画一化しようとするのは、明らかに破綻しています。そのような思考方式からは何も生まれません。

世界にたいする覇権を実現しようとしたり、本質的に、命令によって、あるいは命令による指導力の維持をはかろうとする米欧の思いあがった思考は、米欧諸国の指導者たちの国際的威信を実際に低めていますし、かれらの全般的な交渉能力にたいする不信感を増大させています。米欧諸国の指導者たちは、今日言ったことを明日にはくつがえし、今日文書に署名したことを明日には破棄してしまうのです。やりたい放題しています。いかなる一貫性もありません。どのようにして公的文書が署名されるにいたり、そこでは何が議論され、今後何が期待できるかについて、まったく不明瞭なのです。

このようなことはウクライナ危機との関連で、とりわけ、2015 年になされたミンスク合意との関連で明らかになりました。2、3 週間前に、プーチン大統領を除くミンスク合意へのすべての署名者が、具体的には、フランソワ・オランド前フランス大統領、ペトロ・ポロシェンコ前ウクライナ大統領、アンゲラ・メルケル前ドイツ連邦首相は、最初から、ミンスク合意を実施しようとは思っていなかった、ウクライナを再武装するための時間稼ぎのために署名したと公の場で述べました。こんにちの危機の種は、このときに蒔かれたことは明らかです。

講演を終えるにあたり、わたしは、プーチン大統領が提示した、グローバル化された現代世界の特徴を理解し、そのなかでロシアがどのような位置を占めているかを示すことが適切であると思います。プーチン大統領は演説のなかで、これらの基本的内容をつぎのように明らかにしました。

「ソ連の崩壊により、地政学的な力の均衡が崩れました。米欧は、このことをもって勝利者になったかのように感じ、米欧の意思、文化、利益のみが保障されるとする、一極化した世界の到来を宣言しました」

「いまや、米欧が世界を無制限に支配するという歴史的時代は終わりを告げようとしています。一極化された世界は過去のものとして追いやられようとしています。わたしたちは、歴史的な岐路に立っています。わたしたちは、第二次世界大戦後の、おそらくもっとも危険で予測不能な時代に、それと同時に、もっとも重要な 10 年を生きているといえます。米欧は、人類を思いのままに支配することはできず、世界の大多数の国家は、もはやそれを耐え忍ぼうとは思っていません。これこそが新しい時代の主要な矛盾です。古い言い方をすれば、一定程度、革命的状況がかもたされています。エリート層は我慢には耐えられず、人々は、もうこれ以上、我慢するような生き方はしたくないと思っています」

「この状態は、世界的な紛争または紛争の連鎖をはらんでおり、米欧含め、人類への脅威となっています。こんにちの主要な歴史的課題は、現存する矛盾を建設的で有意義な方法で解決することです」(2022 年 10 月 27 日におこなわれた「バルダイ国際討論クラブ」第 19 回会議の最終総会に参加したプーチン大統領の演説)

(2023 年 2 月 12 日、金正日総書記生誕記念チュチェ思想全国セミナーにおける講演)